

## 戦前と戦後——思想史から問う——

中村 春作

戦前と戦後をまたぐ、ほぼ半世紀の間（元号でいえば、ほぼ「昭和」全期に相当する時期）の言説空間については、これまでも多方面から多くの議論が行われてきた。一九三〇年代に特化して問題の発生を見ようとするもの、あるいは戦後に延長され連続した問題として戦前をとらえる、たとえば「総動員体制」「一九四〇年体制」といった問題枠組みからこの言説空間をとらえ直そうとするもの等々、従来になかった視点からの議論が活発に行われてきた。それらは、いわば「戦前」と「戦後」といった区分を自明のものとしてきた従来の視点から見えなくなっていたものごとをたしかにあらわにし、現在の私たちに内在する問題の起源を明らかにするような方向で行われてきたといつてよいだろう。そうした視線の交差のなかで、「日本思想史」という学問の由来を昭和初期に求める議論も発生してきたといえる。他方、「戦前」と「戦後」の間には厳然たる断絶の意識があり、その自己意識をばねにして日本思想史学が展開してきたのも明らかな事実である。日本思想史学を専門とする私たちにとって、昭和から平成に年号が変わってすでに二十年が過ぎた現在、「戦前」と「戦後」の問題を、それを考える視座の新たな構築を求めて、あらためて具体的場面から問い直し、かつ問題を国内的視座に自閉させることなく考えてみよう、というのが本シンポジウム企画の主旨である。

もとより、今回想定した約半世紀にわたる言説空間には、きわめて多様で屈折した思想の展開があり、それらを一括して論じる、あるいは一定の概念枠組みで裁断しようという意図を、私たち大会委員会委員は毛頭有していない。私たちにとつてなかなか客体視がたい、しかしながら私たちのいまを規定している、この時期の思想への切り口を見いだしたいと切に願っている。そしてその際、最重要な問題として存するのが、ナショナリズムの問題であると私たちは考えた。「戦前―戦後」を通じて、変質・変容しつつも今なお私たちの思考や行動を呪縛するものとしてのナショナリズムの質を、「国民国家」論の洗礼を受けた現時点であらためて問い直し、また、昭和期日本のナショナリズムを、同時期の西洋思想世界の展開をもふくめたより大きな思想潮流、二十世紀思想史の中に置いてみることを、本シンポジウムでは試みようと思ひ至った次第である。

本シンポジウムでは、ケイト・W・ナカイ氏と渡辺和靖氏の司会の下、まず、中江兆民や植木枝盛ら明治期知識人の思想研究をはじめ、近年、徳富蘇峰を軸に日本ナショナリズムの系譜を問い直してこられた米原謙氏、ドイツ政治思想史・ナショナリズム研究を基盤に、平泉澄や京都学派を題材に、昭和期日本の政治主義を精力的に論じておられる植村和秀氏の両氏からご報告をいただいたあと、苅部直氏、菅原潤氏からコメントをいただき、その後、会場からの意見を交えて盛んな議論が展開された。

企図した問題の性格上、この一回のシンポジウムで何らかの完結した答えが出るという性質のものではもちろんない。グローバリゼーションとナショナリズムの相克のただ中に生きる今日、本シンポジウムで報告者、コメンテーターから投げられた問題構成を、自らの切実な課題として考え続けていきたいと思う。

(広島大学教授)